

硯友會暮春兼題

黒本齋堂先生評閱

閑庭綠滋

訪、ふ、人、の、影、た、に、見、え、す、な、り、に、け、り、庭、ハ、青、葉、の、ま、け、り、の、み、し、て

ふくちの山人

評曰 起句に閑の字を點せずしてうの意明なり妙

全

は、な、散、り、て、鳥、さ、へ、と、は、ぬ、こ、の、頃、は、軒、は、を、く、ら、く、若、葉、を、ひ、ゆ、く

松 露 生

全

世、の、中、の、ち、り、を、よ、そ、な、る、か、く、れ、家、は、木、々、の、青、葉、を、日、に、ま、け、り、ゆ、く

江 楠 生

評曰 綠樹重陰蓋四隣、青苔日厚自無塵の趣あり知らずこの隠士科頭箕躰長松下、白眼看他世上人の概ありやなしや

全

と、ふ、人、も、照、る、月、影、も、な、か、り、け、り、庭、の、梢、の、ま、け、り、あ、ひ、つ、く

哲 人

全

人、と、は、ぬ、宿、の、春、さ、め、ひ、と、夜、に、て、み、と、り、ま、た、る、夏、木、か、け、か、な

蝶 々 子

廢寺聽鶉

ふくちの山人

古、寺、に、旅、寝、や、す、ら、ん、さ、み、た、れ、の、夜、た、ま、さ、く、な、り、山、郭、公

評曰 山の字旅寝の字にもまへていさよし

全

荒、は、て、し、軒、は、に、ち、か、く、す、む、夜、半、の、月、影、た、か、く、な、く、ほ、と、ま、さ、す

章 夫

全

ゆきくれて人もあらず野の古寺にきくもさひしくなく郭公

蝶々子

蛙聲漸多

足ひきの山田の早苗のひぬらし蛙の聲の日にまさりゆく

ふくちの山人

全

はる暮て夏きにけりと小山田になくや蛙の聲えきりなり

江楠生

全

時を得て蛙なくなり賤のをか水せきいれし小田の夕くれ

哲人

評曰 絶佳

全

春さめの布留の山田に水ませは時を得良に蛙鳴くなり

蝶々子

評曰 不知不識順帝之則

春暮花少

くれいそく春の山へをきてみれば猶もゆかしき花を残れる

ふくちの山人

評曰 疾風知勁草の意あり

全

暮れて行く春をどよめて白雲のあとたえくに残る花かな

蝶々子

山中藤花

ふくちの山人

川なみのこすかど見ればまら藤の花の谷間にかゝるなりけり  
全 哲 人

山松の梢をこゆる藤なみは雲より落つる瀧かどを見る  
全 章 夫

つた道のまけみにさける藤波の木の間かくれの色のゆかしさ  
全 蝶々 子

里遠きみやまの奥も君か代のゆかみかゝれる松の藤なみ  
評曰 着想渾厚、聲韻俱高

雑歌

春雨夜静

江楠生

ひるの間に花みま夢をむすへとやまめやかに降る夜の春雨

残花

訪ふ人の跡たえくに咲き残る花こそ春のどまりなるらめ  
はなの中の花とも見よやくれてゆく春の梢に残る花をは

新樹

一 露庵

夏くれは霞の衣ぬきかへて峯の若葉の色そすしき

失題

四 變生

われこそはふりし野中のひとつ井戸忘草れふ中に埋れて